

群 教 セ	G02 - 02
	平 26. 254 集
	社会-小

社会的事象の意義について 考える力を高める指導の工夫

—資料や事象の比較・関連付けを生かした「学び合い」活動を通して—

特別研修員 高橋 弘一

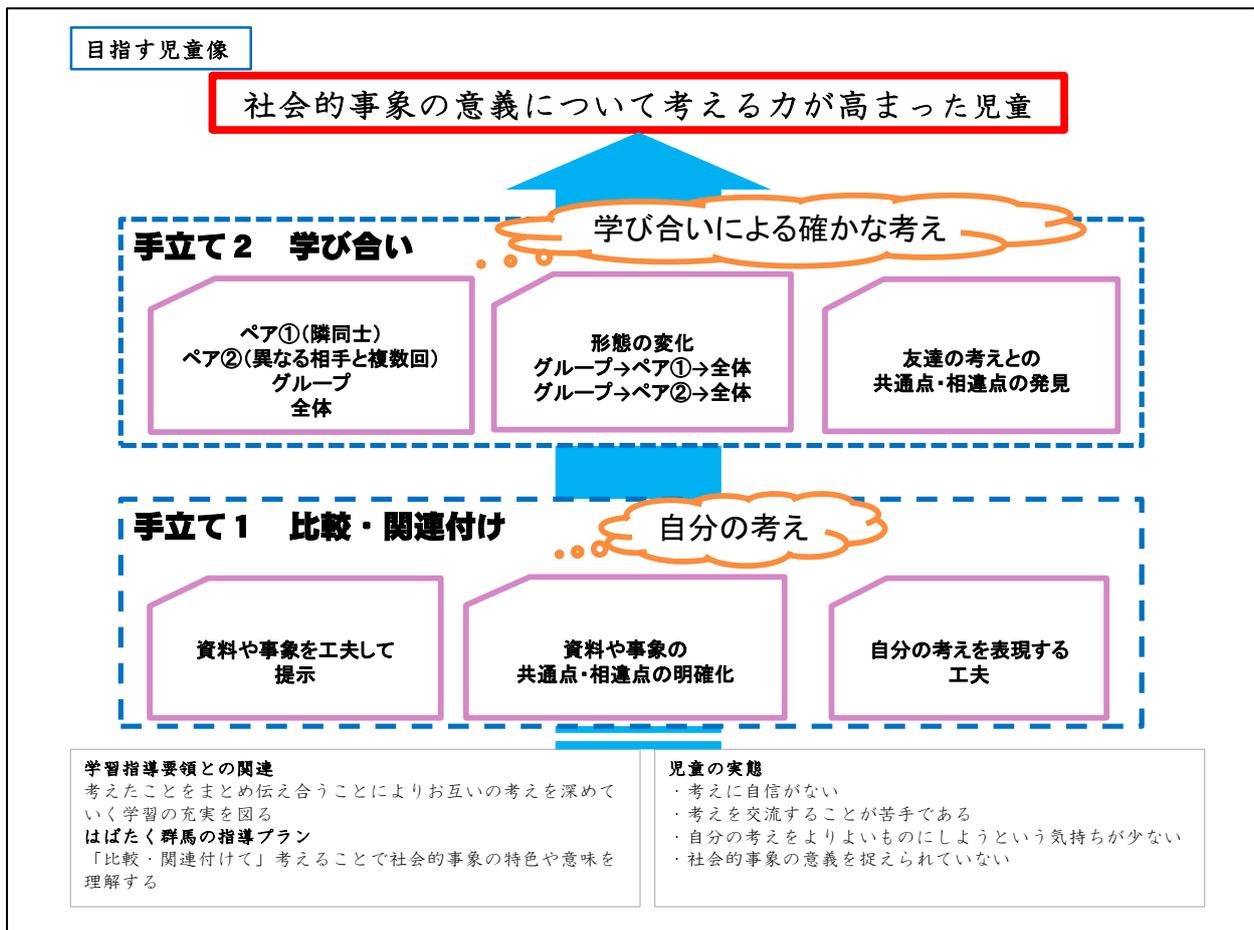
I 研究テーマ設定の理由

小学校学習指導要領解説社会編の改善の具体的事項には「考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合うことによりお互いの考えを深めていく学習の充実を図る」とある。また、「はばたく群馬の指導プラン」では社会科の課題と解決に向けて伸ばしたい資質・能力の一つに「比較・関連付けて考え、社会的事象の特色や意味を理解すること」を挙げている。本学級の児童は資料などから自分の考えを持つことや考えを交流すること、友達の考えを自分の考えに生かすことが苦手な児童が多い。また、社会的事象の意義やつながりを比較・関連付けて捉えることに課題がある。

以上のことから、資料や事象を比較・関連付けて考えたことを生かし、学び合いの形態を工夫することにより、児童が新たな考えに気付くと共に、自らの考えを練り上げることにつながり、社会的事象の意義について考える力を高めることができると考え、本主題を設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

(1) 手立て①～比較・関連付けて考えるための工夫

	比較・関連付けて考える資料の工夫	考えを持つ、書く工夫
実践1	比較資料「蒙古襲来絵詞」（1回目と2回目、元と日本）	ノート、吹き出し
実践2	日清・日露戦争の「比較表」（共通点・相違点を捉えやすく）	ワークシート、吹き出し

実践1では、資料「蒙古襲来絵詞」を見て「日本と元」「文永の役と弘安の役」の共通点・相違点を比較・関連付けて、日本が勝った理由を考えた。また、幕府と武士の関係の変化を考える際には吹き出しを使い、そこに考えを書く活動を行った。武士の気持ちで考えることができ有効であった。しかし、比較する資料「蒙古襲来絵詞」は日本が勝った理由を考えるには難しく、比較・関連付けて考えるための資料の工夫が課題であった。

実践2では実践1の課題を踏まえ資料提示を工夫した。日清・日露戦争を比較するために原因や費用、戦死者数、結果などを比較表にまとめて提示した。表下には、表を見ながら気付いたことを書けるワークシートを付け、共通点・相違点が見えるような書き出しの言葉を指示した。また、吹き出しは有効であったので実践2でも活用した。

(2) 手立て②～学び合いの形態の工夫

実践1	○グループ →ペア①（隣同士）	→全体
実践2	○グループ →ペア②（異なる相手と複数回）	→全体

実践1では、自分と違う考えに触れることができるようグループで学び合いを行い、元寇で日本が勝った理由について考えの交流を行った。ペア①では、自分の考えを吹き出しに書いてから隣同士のペアで学び合いをした。吹き出しを並べて比較しながら活動できた。ペア①（隣同士の相手）では考えに偏りがあり、学び合いが充実しない場合もあるという課題が見られた。

実践2では、比較表から見いだした共通点・相違点をワークシートに書き、それをもとに日清・日露戦争の様子をグループでの学び合いによって明らかにしていく活動を行った。さらに、二つの戦争により日本と外国の関係がどう変わったかを吹き出しに書き、ペア②（異なる相手と3回以上）で学び合い活動を行った。実践1では、考えに偏りが出てしまう様子も見られたので、より多様な考えに触れたり、いろいろな友達との交流によって友達の考えを取り入れたり、自分の考えを確かなものにしたたりすることができた。

III 研究のまとめ

1 成果

- 資料の内容、提示の工夫により社会的事象を比較・関連付けて捉え考えることができた。
- 学び合いの形態の工夫により、違う考えに気づき、自分の考えを練り上げることができた。
- 複数の学び合いによって、友達の考えを取り入れながら社会的事象の意義や、つながりについて考える力を高めることができた。

2 課題

- より考えを高めるため、学び合いで交流した後、児童が自分の考えを練り上げる時間の確保や学び合いの状況を適宜、把握する工夫が必要であった。
- 本時のねらいを明確にし、的確な、比較・関連付けるための資料の工夫が必要である。

3 提言

- この研究の汎用性を検証するため、6年生だけでなく他学年でも実践する必要がある。

＜授業実践＞

実践 1

1 単元名 「武士の世の中」 (第6学年・1学期)

2 本単元及び本時について

本単元は、学習指導要領第6学年の目標(1)に関する内容(1)ウの「源平の戦い、鎌倉幕府の始まり、元との戦いについて、武士による政治が始まったことが分かること」に基づいて設定した。源平の戦いを通して武士が台頭し、源頼朝がどのようにして平氏を倒し征夷大將軍となるに至ったか、鎌倉幕府の成立から、源頼朝がなぜ東国の武士たちの信頼を得て、どのように従えたのか、北条時宗や御家人たちが、元の襲来に対してどのように戦い、国を守ったのかを学び、なぜ、鎌倉幕府が弱体化したかを考える。

本時は全6時間計画の5時間目で「蒙古襲来絵詞」の元と日本の様子を比較し、日本が勝った理由をグループで話し合う活動、元寇後の武士と幕府の関係を考える場面で、竹崎季長が何を話しているかを考え、隣同士のペア(ペア①)で話し合う活動を通して幕府と武士の関係が崩れ幕府の力が弱まった理由を元との戦いと比較・関連付けて考えることをねらいとしている。本時の授業の視点は以下のとおりである。

学び合い〈1〉日本が勝った理由について、資料などを比較しながら考え、グループで学び合いをすることは有効であったか。

学び合い〈2〉幕府の弱体化と元寇を関連付けて考える際、ペア①での学び合いは有効であったか。

3 授業の実際

まず、導入で前時の学習「ご恩と奉公の関係」を振り返った。その後、図1のように「蒙古襲来絵詞」から数枚を提示し、興味を持たせることで、児童は、課題1「武士たちは元とどのように戦ったのだろう」を把握した。次に資料を用いて2度の戦いについて説明した。その後の様子は以下のとおりである。

T どっちが勝ったか分かるかな。勝ったのは日本
S1 えーっ
S2 すごいっ ～中略～
T 実はもう一回来るんだよ。
(複数の児童は資料を近くに来てよく見ていた)
1回目は日本が勝ったけど2回目は元が勝ったと思う人?
S (2/3ほどの児童が挙手)
T 日本が勝ったんじゃないかなと思う人?
S (1/3ほどが挙手)
T 実は勝ったのは…日本なんです。
S3 「えー、なんで？」
T では日本が勝った理由を考えてみよう



図1 蒙古襲来絵詞

学び合い〈1〉～日本が勝った理由について比較を生かして考え、グループで話し合う

元との戦いに日本が勝つことができた理由を個人で考える時間を確保した。その際、掲示してある絵詞、前時までのノートを参考にするよう伝えた。資料を参考にする際の注意として「日本と元との違い」「1回目との違い」に気を付けて、比較しながら考えるよう助言した。

学び合い活動は座席の前後のペアによる4人グループで行った。一人ずつ自分の意見を話した後グループ内で話し合う場を設定した(図2)。

全体で話をする前に「自分と異なる考えに触れることができたか」「同じ考えの児童がいたか」を聞く



図2 グループでの学び合い

と、異なる考えに気付いた児童がほとんどで、同じ考えの児童がいたという児童が約半数いた。個人で考える段階ではいろいろな考えが出た。

その後、全体で話し合ったことを共有していく中で、グループでの話合いで意見が変わったり、友達の考えと自分の考えを比較したりすることができ、自分の考えをまとめることができた。全体で共有した意見は、「日本の土地で戦いやすい」「暴風雨」「石の壁」「協力した、団結」「一生懸命戦った」「将軍のために戦った」などというものであった。

学び合い〈2〉～竹崎季長は何を話しているのかを関連付け

を生かして考え、ペア①で話し合う

「この戦いの後、幕府や武士はどうなったのでしょうか」という二つ目の課題を提示し、竹崎季長が幕府の役人と話している絵詞に吹き出しを付けたものに「何を話しているか」を考えて書き(図3)、ペア①で学び合い活動を行った(図4)。

学び合い〈1〉で出された意見で、武士が将軍のために一生懸命戦ったことが出され、その後、全体で「ご恩と奉公」の関係について確認できたため、武士たちが将軍のために、また領地を得られると信じて一生懸命戦ったことを押さえられ、「領地がほしい」という内容が確認できた。学び合いによって「ご恩と奉公」の関係と「元寇」、「元寇」と「幕府と武士の関係」を関連付けて捉えることができた。

まとめでは、学習課題を振り返り、「元との戦いによって幕府と武士の関係はどうなったか」を「元寇」「幕府」「武士」の三つの言葉を使ってノートにまとめた。元寇と、幕府と武士の「ご恩と奉公」の関係が崩れていったことを関連付けて考えた内容を記述することができた児童が多かった(図5)。

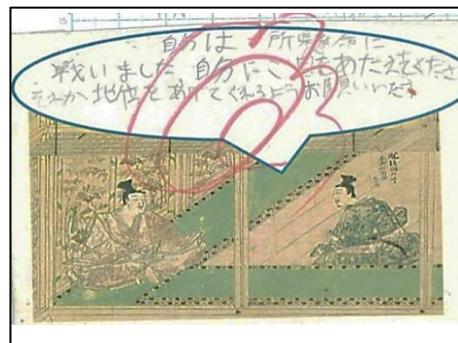


図3 吹き出しに児童が書いた考え



図4 ペア①での学び合い

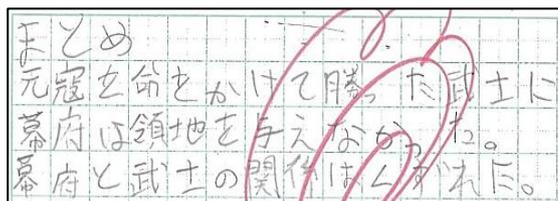


図5 児童が書いたまとめ

4 考察

(1) 比較・関連付けて考える工夫について

- 友達との比較・関連付けは、「友達と違う」「似ている」など意識して考え持つことができていた。また、友達の考えを取り入れて自分の意見に付け加えたり、修正したりする姿も見られた。
- 何と何を比較・関連付けて考えるのか明確に指示することや、発問の工夫が必要である。
- 資料の提示に工夫が必要である。最後の3枚目の資料に目を向け「元と日本」「1回目と2回目」の比較を考えさせようとしたが、先に出した2枚の資料の方が比較しやすく、しかも元が勝ったのではないかという印象が強いものであった。資料の選択、提示の仕方、見る観点などをもう一度検討したい。さらに、比較したことが分かるようなワークシートなどの工夫も必要である。

(2) 学び合いの形態の工夫について

- 多様な考えを引き出すことができ、発表の後の話合いでは活発に意見を交わす姿が見られた。
- 学び合いにより自分の考えに自信を持つことや、違う考えに触れることができた児童が多く見られた。
- 一部のグループ、ペア①では、多様な考えが出ずに考えの高まりが見られなかった。
- 既習事項の確認や教師の投げかけが多くなってしまい、比較・関連付けや学び合い活動が必ずしも社会的事象の意義について考えることにつながったとはいえなかったため、比較・関連付けの仕方や、学び合いの形態、その組み合わせの工夫が必要である。
- 発表が一通り終わると学び合いが終わってしまうグループが見られた。話合いの状況を細かく確認したり、助言したりする必要がある。

実践 2

1 単元名 「世界に歩み出した日本」 (第6学年・2学期)

2 本単元及び本時について

本単元は、学習指導要領第6学年の目標(1)に関する内容(1)クの「大日本帝国憲法の発布、日清・日露の戦争、条約改正、科学の発展などについて調べ、我が国の国力が充実し国際的地位が向上したことが分かること」に基づいて設定した。具体的には①国会開設に備え政党を作った板垣退助や大隈重信、憲法制定に重要な役割を果たした伊藤博文の働きなどを調べ、明治政府が20年ほどで憲法を制定し、立憲政治が確立したこと。②日清戦争(下関条約)・日露戦争(ポーツマス条約)で大きな働きをした人物を調べ、新しい国際環境に置かれた状況で二つの戦争に勝利し、講和条約を締結することによって国の安全を確保することができたこと。③陸奥宗光や小村寿太郎の働きを調べ、欧米諸国との不平等条約を対等なものに改める交渉を進め、改正に成功したこと。④野口英世などの業績を調べ、科学の面においても国際的地位が向上し、世界的に優れた学者が活躍したことが分かるようにする。これらの学習を通して、国力が向上し、国際的地位の向上や国際的な活躍などが分かるようにしていく。

本時は全7時間計画の3時間目に当たり、比較表を用いて二つの戦争の様子を捉え、比較を生かして学び合い活動を行う。学び合いの形態を工夫し、二つの戦争の結果と国際的地位の変化とを比較・関連付けて考えることができるようにすることをねらいとする。本時の授業の視点は以下のとおりである。

学び合い〈1〉日清・日露戦争の比較表から共通点・相違点を考え、学び合いをすることは有効であったか。
 学び合い〈2〉戦争の勝利と国際的地位を関連付けて考える際の学び合いの形態の工夫は有効であったか。

3 授業の実際

学び合い〈1〉の活動に入るまでの流れは右記のとおりである。

学び合い〈1〉～

二つの戦争の比較資料から結果や気付いたことをグループで話し合う

日清・日露戦争の比較表(図6)を提示、配布し共通点と相違点はどこかを考え、ワークシートに書かせた(図7)。中央に項目、左右に日清・日露戦争のそれぞれの内容を表にし、下に気付いたことを書けるようにワークシートを付けた。共通点や相違点はどんなところかを比較しながら見るように説明し、共通点は「両方とも～」相違点は「日清(日露)戦争は～」と記述するように話した。

日清戦争1894～1895	原因	日露戦争1904～1905
朝鮮をめぐって、 約2,5億円。	露国	朝鮮、中国東部(遼州)をめぐって、 約15,2億円。
約12,3万人。	費用	約100万人。
約1,7万人。	兵士の数	約12万人。
日本	戦死者	日本
下関条約	条約	ポーツマス条約
清から約3割の領土を得る。	①賠償金	なし。
清からリャオトン半島、台湾を得る。	②領地	ロシアから樺太の南半分を得る。
清は朝鮮が独立していることを認める。	③その他	ロシアは日本が樺太を支配することを認める。

- T 日本は国際的地位が低いから、どうしたいと思っていたんだっけ？
 S1 地位を上げたい
 T そのためにどんな国づくりを進めていた？
 S2 「強い国」「産業を発展させる」
 T そうだね。当時の日本や周りの国の様子を表した絵を見てください
 (中略～資料から日清戦争、日露戦争があったことを知る)
 T 今日の課題は「日清・日露戦争によって、日本と外国の関係はどのように変わったか考えよう」です(板書。児童は学習課題を復唱)
 T ちなみに、どっちが勝ったと思う？
 S3 「日本」「清には勝った」
 S4 「両方とも日本」など(このあと比較表を用いた学び合い〈1〉へ)

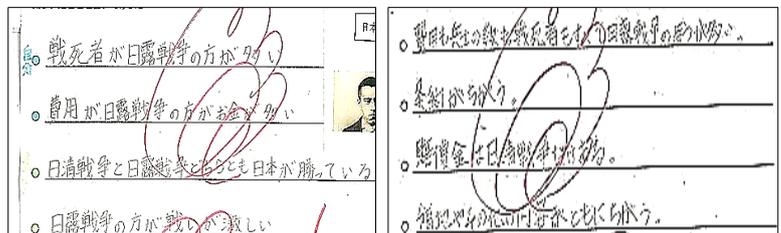


図6 日清・日露戦争の比較表

図7 児童が記入したワークシートの記述例

学び合い〈2〉～二つの戦争と、日本と外国の関係や国際的地位の変化とを関連付けて考え、ペア②で話し合う

近代化の遅れや国際的地位が低いことを理由に、不平等条約の改正がなかなかうまくいかず苦勞していた時期において、児童はこの戦争を経た日本人の言葉を考え、吹き出しに書いた(図8)。自分の考えが

書けない児童には机間巡視で、教師から「欧米諸国に対してどんなことを言うかな」などと声をかけ、考えが書けた児童には「朝鮮人・中国人」の吹き出しを配り、児童は日本人ではなく、立場の違う朝鮮人・中国人はどんなことを話さだろうかと考えた。これは戦場となった国の人々や、欧米諸国の植民地化が進むアジアの一員としての立場についても触れる必要があるからである。

学び合いは吹き出しに書いた紙を持って、異なる相手と3回以上（ペア②）考えの交流をするようにした。中心は日本人の吹き出しとし、国際的地位の向上に関わる内容をしっかり押さえ、朝鮮人・中国人の吹き出しも書けた児童は、お互いに意見交流をした。



図8 児童が書いた吹き出しの言葉

国際的地位の向上について書くことができた児童が約半数ほどおり、ペア②での学び合いで二つの戦争が国際的地位の向上につながったという考えに触れることができた。全体で、ペア②での学び合いで話し合われた考えを共有し、二つの戦争と日本の国土的地位の向上につながる内容を確認できた。まとめは「二つの戦争によって、日本は～」という書き出しで書いた（図9）。

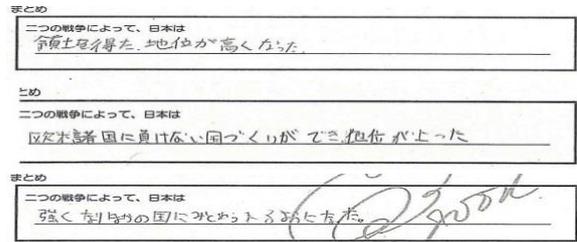


図9 児童が書いたまとめの例

4 考察

(1) 比較・関連付けて考える工夫

- 日清・日露戦争の比較表を活用したことにより、視覚的に日清・日露戦争について捉えやすくなったことで、自分の考えを持つことができた。いつも書けない児童も、数は少ないが書けていた。
- 比較・関連付けて考えるための資料を分かりやすいものにすると、ねらいどおりに考えられる。さらに教師が的確な発問や説明ができると、児童は考えやすくなる。
- 教師が共通点・相違点を意識するよう口頭で説明したため、多くの児童はその点に注意して気付いたことを書けていたが、最初から共通点と相違点の欄を分けた比較表にしておく整理され、後で見返したり、確認したりするときに分かりやすい。

(2) 学び合いの形態の工夫について

- グループでの学び合い（図10）は、比較表に自分の考えを記入してからの活動で、自信を持って発表できた。
- 友達の意見を聞いて、自分では考え付かないことに気付き、比較表に書き込む児童もおり、考えが広がった。特にあまり考えが書けない児童に有効である。
- グループでの学び合いでは、グループによって話し合いの深まりに差があるので、その状況を見取る工夫や、話し合ったことをホワイトボードに書かせるなどの工夫が必要である。
- ペア②では進んで交流する相手を探し、複数の友達と学び合いができた（図11）。学習課題の答えとなることに近い内容を押しえられていたので、何人かと意見交流する中で課題を振り返り、答えを確認するという意味でも有効であった。
- 比較・関連付けを生かした学び合い活動は、社会的事象の意義を考える上で有効であった。



図10 グループでの学び合い



図11 ペア②での学び合い